

5.

古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて

北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

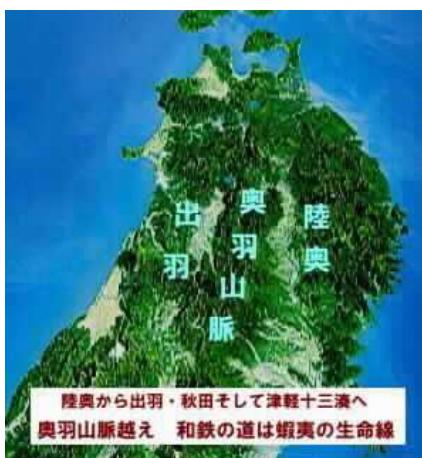


北上市和賀から奥羽山脈を望む 2003. 3. 15.

1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線
2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地
 - ◆ 木村清幸氏「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋
3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003. 3. 15.
 - ◆ 秋田大学鉱業博物館・古代秋田城遺跡・製鉄地名の残る金足集落

1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線

この和鉄の道での鉄の霸権をかけた争い



古代奥州では奥羽山脈を背骨として山脈から流れ出る大河の流域は蝦夷の支配地で独自の文化を育んできた。

西侧 陸奥国 北上川流域並びに東側 出羽国 最上川・雄物川・米代川流域などである。

この奥羽山脈には黒鉱鉱脈が走っており、鉄・金・銅などの鉱物資源が有り、蝦夷の重要な公益品であり、蝦夷の力の源泉であった。

山でこれらの鉱物の採取加工に携わる山夷と河の流域で農耕に携わる田夷とが多くの部族に分かれて生活していた。

古代 秋田は蝦夷の支配地 出羽国 雄物川の河口日本海海岸に位置している。

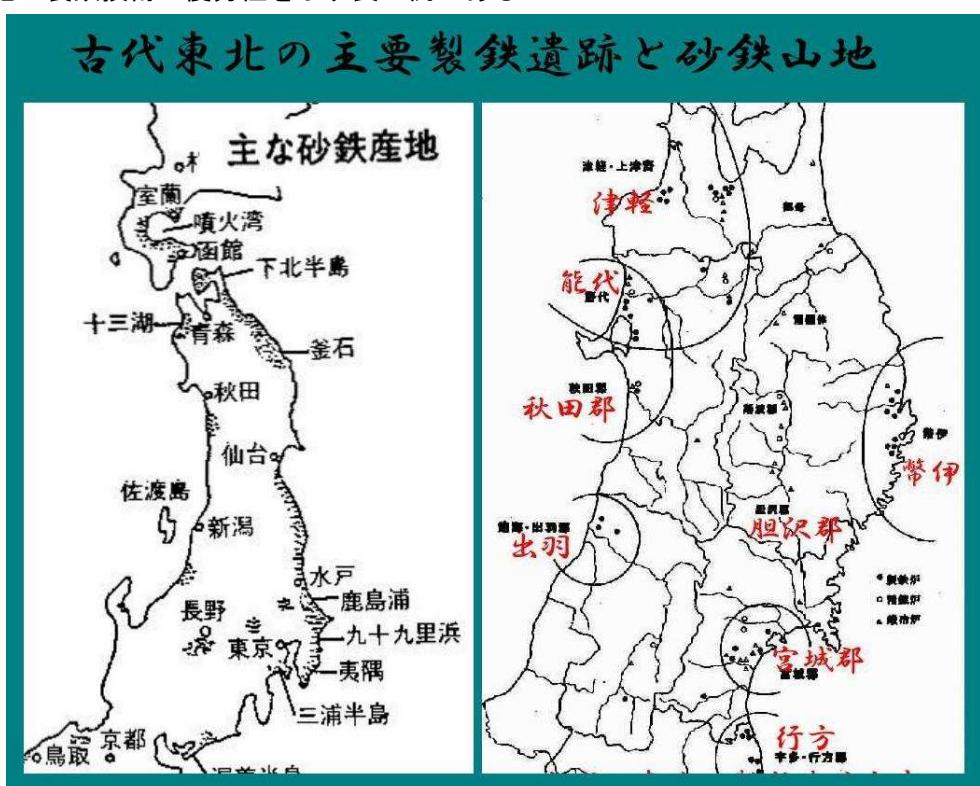


当時の日本のメインロード東国から蝦夷の最前線陸奥国北上川流域に入り、そこから奥羽山脈を越えて出羽国を通り日本海側に出て、蝦夷の国際貿易港である津軽十三湊への要衝の地にあり、まさに蝦夷の生命線重要路に位置している。

採取された鉱物資源 鉄・金・銅などが、このメインロードを通って十三湊で取引されたという。鉄はもっとも重要な交易品であり、この道はまさに蝦夷の和鉄の道。

蝦夷は奥羽山脈山中の鉄 川の流域・海岸の砂鉄を原料にして鉄精錬・鍛冶加工を行い、自らの武器・農耕具として使うだけでなく 交易品として和鉄を産した。蝦夷の武器 蕁手刀の優秀性はその後の日本刀に大きな影響を与えた。

7世紀中頃からの中央政権の奥州征伐により大量に発生したこの蝦夷の鉄の工人たちが、日本各地に連れていかれ、その後の日本各地の和鉄精錬 鍛冶加工の発展に大きなやくわりを果たしたことは良く知られ、蝦夷地の製鉄技術の優秀性を示す良い例である。



図にインターネットで採取した古代東北の製鉄遺跡分布を示した。

7世紀半ばからの中央政権の奥州征伐も基本的にはこの蝦夷の持つ鉄を中心とした鉱物資源の支配が目的と考えられている。

7世紀 越の国の安倍比羅夫が海岸ぞいに北上し、出羽・能代・津軽の蝦夷を恭順させ 俘囚化したのを皮切りに奥州征伐を繰り返しこれらの地方の蝦夷を従属させていった。

7世紀から9世紀にかけての奥州征伐・奥州支配の戦いが繰り広げられ、その征伐の進行北上にあわせ、中央政権は奥州各地に柵をつくり、支配をつよめていった。

しかし、蝦夷は統一された国ではなく、いくつもの集団に分かれた部族集団であり、優秀な薺手刀などの武器で反抗もしたが、次第に俘囚として集団ごとに中央政権に組み入れられてゆく。

すなわち、産鉄を背景にした交易など蝦夷の力は強く 中央政権としてもこれら蝦夷をねじ伏せる事ができず。征伐とはいえ、直接支配できずに懷柔策として、その地方の豪族を俘囚長にして恭順した蝦夷部族を俘囚として支配していったのである。

蝦夷の強力なリーダー 胆沢のアテルイ・和賀のモレが坂上田村麻呂にやぶれ、京都で処刑された後は蝦夷の勢力は次第に弱まり、陸奥は安倍氏 出羽は清原氏といった俘囚長の下にたばねられ、中央政権の支配下に入っていった。



そして この俘囚長を通じた中央政権支配のため、多賀城をスターに 北上川流域には胆沢城 志波城などが作られ、出羽の国にも雄勝城・金沢城・秋田城が次々と作られていった。 中央政権がこれらの城で地方経営を行うと共に蝦夷の手に産鉄の支配が奪い返されるのを恐れ、これら辺境の地での新たな製鉄基地を作る事を禁じ、鉄の工人を集め、直接これら城の中で鉄鍛冶・精錬を行うなど鉄の支配を強め、また、反抗した蝦夷の俘囚は西国へ兵士・製鉄の工人として送られていったといわれている。

この俘囚長支配の中で、蝦夷部族間の争いもたえず 出羽の俘囚長清原氏と陸奥の安倍氏の争い前九年の役 清原氏の内紛後三年の役を経て安倍氏の系統である奥州藤原氏がこの鉱物資源の霸権を握り栄華を極めてゆく。そして中央政権が直接支配が出来るよう



になるのは 奥州藤原氏が鎌倉政権に打たれる中世になってからである。

奥羽山脈を貫く奥州は古代から 蝦夷にとっても中央政権にとっても宝の山。

この霸権をめぐって古代史を彩る壮絶な戦いが繰り広げられた。

奥羽山脈を東西に横切る幾筋かの険しい山岳道はその歴史を刻む奥州和鉄の道

この道は今も新幹線・高速道路が越えて行く重要交通路 そんなこと知る由もないが、昔も今も時代の

流れを吹き込む通商路・文化の道であることに代わりはない。

これらの地を訪問した三月の半ば 奥羽山脈は深い雪に閉ざされ、一筋の鉄路だけが国をつないでいた。

しかし、平野部に下るともう雪が消えて 早春の明るい景色

横手の街のあちこちの商店では 蝦夷のリーダー「アテルイ」の長編アニメ映画 鑑賞会の切符販売が売られていた。

蝦夷の歴史を知れば知るほど 鬼といわれる蝦夷がいとおしくなる。鬼は悪者か・・・・

今 問答無用の戦争がはじまっている。何か智恵はないのか

縄文のサークルにかけた平和の思い 蝶夷の生きた奥州古代 何かヒントにならないか・・・・

2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地



秋田駅より 北の丘陵地



古代秋田城遺跡



金足から八郎潟東岸に続く丘陵地

7世紀後半から中央政権は この奥州・蝦夷地の鉱物資源・鉄の霸権を求めて蝦夷征伐を繰り返し、その支配を強めていった。

秋田での支配の中心としてこの地に733年出羽柵が建設され、760年頃より秋田城と呼ばれるようになった。秋田市内及び秋田市の北の丘陵地から八郎潟の東岸地域にかけては数多くの製鉄関連地名群がある。

一方 数はすくないが、この地域から古代の製鉄遺跡も出土し、この地域が古代からの製鉄基地であった事がうかがえる。

秋田・八郎潟東岸の製鉄関連地名群分布を調べ古代鉄生産の可能性を詳細に検討した木村清幸氏の研究があり、それを引用紹介することで、蝦夷征伐の推進 そして その押さえの中心となった秋田城が建設され、中央律令政権の支配が進む8、9世紀からの古代秋田・八郎潟東岸の地域にあった和鉄生産基地の状況を眺めたい



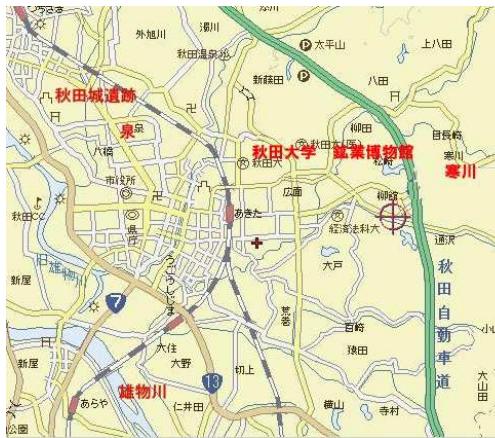
秋田市泉周辺 秋田市内金砂神社



秋田駅より西の丘陵地



金足付近 八郎潟東岸丘陵地



秋田市内に見える製鉄関連地名



秋田市北部 金足から昭和町への丘陵

◆ 木村清幸氏 「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋



「秋田地名研究年報」第 15 号

<http://www5.et.tiki.ne.jp/~koremamu/chimei/nenpoxx/nenpo15/KIMUr.htm>



表 秋田・八郎潟東岸の製鉄関連地名群分布

● 鉄の原料である砂鉄や材料に係わる地名。 蟹沢、金ヶ沢、砂子沢（いなごさわ）金山（かねやま）など	31ヶ所
● 製鉄炉や鉄の生産加工に関連する地名。 踏鞴（たたら）、大平（おおひら）、雷（いかづち）、鍛冶屋敷など	26ヶ所
● 生産された鉄製品の流通を仲介したとみられている神人（じじん）と関連した地名 八田（はった）、神田（かんだ）、飛鳥田（あすかだ）、八幡田（やわただ）等	20ヶ所
● 製鉄や須恵器の生産技術を持つ工人集団の出自を表わしたとみられる地名。 泉、今泉、小泉、泉田、泉八日、泉沢、寒川等	11ヶ所

須恵器の生産工人集団や鉄生産工人の多くが五畿の和泉国や今木郷の出自であったことから

工人達の出身地である「泉」を、百濟王に近い鉄工人集団は「寒川」地名を鉄生産の居住地へ出自に因んで付した

表 秋田周辺の古代製鉄関連遺跡の分布状況

● 鍛冶遺構や精錬窯等が出土して古代鉄生産活動が確認できる遺跡 琴丘町堂の下、泉沢、八竜町扇田谷地、能代市寒川、秋田市諏訪の沢、秋田城	六ヶ所
● 製鉄のための鍛冶用炭窯遺構が確認できる遺跡 秋田市大平、能代市十二林、琴丘町堂の下	三ヶ所
● 鉄生産に付随する須恵器の製造を行なう須恵窯が存在 秋田市上新城松木台、大沢、下新城末沢、榎木、手形山、濁川、昭和町元木、能代市十二林	八ヶ所
● 刀子や鉄器類、須恵器が出土する古墳群に近い遺跡。 五城目町岩野山古墳群、井川町飛塚古墳群。	二ヶ所

このように製鉄に関連する地名群は八郎潟東岸の丘陵部を縫うように北上している。

八郎潟東岸部で合計二十カ所とこの地域が古代製鉄の生産基地であったことがうかがえる。

これらの結果を基に製鉄遺跡を中心にして鉄関連地名の分布を調べてみると、南から北へ八郎潟東岸には6つの製鉄地名群の存在が地域性を持ちながら読取ることができる。

表 八郎潟東岸に存在する6つの製鉄地名群

第一群	秋田市上新城の松木台遺跡（八世紀中葉）須恵窯を中心に芋地、閔金、大平、雷田、保多野、雷、泉沢の地名が分布する一帯。
第二群	秋田市金足の大平遺跡と昭和町元木遺跡に連なる丘陵地で、蟹沢、金ヶ崎、大平、砂子沢、山王田、神田、小泉、八幡田等の地名が分布。
第三群	井川町飛塚古墳群跡に連なる丘陵地帯。飯田川町金山、糠塚森、蟹沢、昭和町泉沢、小泉、山王田、井川町大平、赤沢、大菅生、小泉、泉沢の小地名が分布。
第四群	五城目町岩野山古墳群跡周辺一帯。五城目町蟹沢、金ヶ沢、昔ノ沢、雷、大平、八田、泉田、磯の目、踏鞴沢といった地名が分布。
第五群	琴丘町堂の下遺跡、泉沢中台遺跡、八竜町扇田谷地遺跡一帯。琴丘町金畠、小金畠、たらの袋、砂子沢、山本町今泉、泉八日、飛塚、蟹子沢、金山、赤川等の地名が分布。
第六群	十世紀後半の操業年代と推定される能代市寒川、十二林遺跡付近。この洪積台地一帯には、蟹子沢、船沢、赤川、逆川、塩辛田、小野沢、福田等の製鉄生産の施設関連地名が多く分布しているのが特徴である。

鉄の一回の生産には鉄資源としての砂鉄が4300貫(約16.1トン) 鍛冶炭が4250貫(約15.9トン) を必要とすることから砂鉄より鍛冶炭の資源となる木材の枯渇によってその生産基地を移動せざるを得なくなる。

これを手がかりにすればこれらの古代製鉄関連地名・製鉄遺跡分布とその年代を重ね合わせると製鉄の工人が歩いた道筋が見えてくると木村清幸氏はいう。

この鉄工人集団が移動する際に工人達が居住していたことを示す地名が各地に残されており、その地名を手掛かりに集落分布を辿ってみると鉄工人の通った道筋が見えてくる。

これをこの秋田・八郎潟東岸の製鉄遺跡群にあてはめると次の二つの集団の道筋が見える。

製鉄関連地名から読み取った 古代 八郎潟東岸の製鉄集団の足跡

● 原住地の和泉国の「泉」を地名に付して移動している工人集団

秋田城に近い秋田市泉の泉山周辺を起点に、秋田市五十丁・泉沢、秋田市金足・小泉、昭和町上虹川・小泉、泉田、井川町北川尻・泉田、黒坪・小泉、五城目町高崎・泉田、山本町下岩川・今泉、森岳・泉八日、琴丘町鹿渡・泉沢に至まで、この「泉」を付した地名が八郎潟東岸を徐々に北進し工人集団の移動した道筋が読み取れる。

● 百濟王の一族で東国を経て出羽国に来た寒川工人集団

秋田市の鍬代山を中心に太平・目長崎と下北手・寒川付近で長期間に亘る鉄生産を行い、元慶の乱が終息した後に鍬代山から北の能代市寒川付近へ移動。規模の大きな製鉄生産施設の跡が発掘されて、ここにも工人集団が北進した道筋が見える。

緻密な地名解析にビックリすると共にこの木村氏の製鉄解析で解き明かされたごとく古代秋田には永年にわたって鉄の生産基地があったことがうかがえる。

都からも奥州支配の拠点多賀城からも遠く離れた奥羽山脈の山影 出羽国に置かれた秋田城はまさに蝦夷の生命線和鉄の道ににらみを闇かす一大拠点であったろう。

また、秋田城の中に鍛冶遺跡があるが、朝廷か蝦夷征服後 鉄生産基地が蝦夷に落ちるのを恐れて、辺境の地で独自での鉄生産を禁じ、自ら城の中で鉄生産加工をやった痕跡であろう。



秋田城遺跡 と 秋田城政庁後 発掘現場 2003. 3. 15.



丘陵地の一角にある秋田城そして鉄の工人集団が住んだという秋田市金足

どこまでも続くまだ春浅い丘陵地を歩くとここがそんな古代日本の歴史を飾る檜舞台とはとてもおもえぬのどかな林の中である。また、この明るい丘陵地の林の中にいると奥州征伐という当初抱いていたこ

とばのイメージとは何か違う蝦夷と中央政権との関係を感じている。

秋田からその後金沢柵があった出羽横手を訪問したが、この出羽・秋田でも蝦夷のことばの暗さはない。



前にかいたごとく 青森・津軽・鹿角で感じたのと全く同じ。

やはり この奥州が中央とは別に大きな文化圏を持ち、それが今もそこに暮すひとたちに生きづいていて、よそ者の我々が抱くイメージからは程遠いのかもしれない

3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003. 3. 15.

秋田大学 鉱業博物館・古代秋田城遺跡・古代製鉄地名の残る金足集落

- 3.1. 秋田大学 工学資源学部 付属 鉱業博物館
- 3.2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城
- 3.3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる

鉱物資源の宝庫秋田にあって古くから鉱物資源開発・

金属材料のエンジニアを育ててきた秋田大学

金属材料を志す者にとって是非とも訪問したかった秋田大学鉱業博物館である。

また 何とはなしに蝦夷の最北の地が秋田。でも縄文から見ると日本の中心 米代川・雄物川流域にはストーンサークルはじめ多くの古代遺跡あり。

また秋田・能代の海岸に古代製鉄遺跡の印がついている。そして 古代には秋田城が置かれている。

秋田は蝦夷の時代からの産鉄の根拠地ではないか・・・・????

そんな 心もとないイメージの中で



- 北上市から西へ和賀川に沿って奥羽山脈を越え米沢へ至る道は
「奥州藤原氏が支配した鉱物資源の通商路 秀衡古道」
その奥羽山脈の一番奥深いところか仙人峠そこから鉄が出る。
相澤史郎著「奥州・秀衡古道を歩く」
- 蝦夷のリーダー「アテルイ」を描く佐藤清忠氏の「ヒタカミの鬼 一和我の里一」に
別項のような文章があり、次のことが活き活きと書かれているのを知った。
和賀は蝦夷の主交易品 和鉄の生産基地。
北上川流域の陸奥から奥羽山脈を越えて出羽に入り、日本海に面する秋田
 - ・ 津軽十三湊に至る道は蝦夷の生命線 鉄の通商路

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html> より

奥州藤原氏はこの蝦夷の鉄の霸権を受け継ぎ、平泉の繁栄へとつながり、古くからの蝦夷の鉱物資源・鉄の通商路を受け継ぎ それが「秀衡古道」として今に残っている。

薄ぼんやり縄文の北東北 country walk で得た秋田のイメージと 鉱物資源・蝦夷 和鉄の国「秋田」が結びつくにつれ、一度は是非秋田から出羽の山里を歩かねば東北は語れないとの感が強くなった。私が秋田へ出かけたのは 3. 15. の早朝。 秋田行の新幹線に飛び乗った。秋田までそのまま新幹線で行き、帰りに横手から北上線に乗って仙人峠を越えて和賀・北上へ出る計画。

福島 吾妻・安達太良連峰 蔵王連峰 そして仙台を越えて 栗駒・焼石・和賀山 盛岡から八幡平 へ

と続く奥羽山脈の峰々にはべったりと雪がつき、快晴の空に壁となって聳えている。この山の向こうが出羽・秋田。 蝦夷の本拠地である。

盛岡を越えて田沢湖線に入り、山中に入ると深い雪。よくまあ こんなところに鉄路をのばしたものだと思う。秋田・横手から北上に抜けた仙人峠越えも 福島から米沢への道も雪深いすごい道。

でも これらは いずれも 古代から受け継がれた奥州の通商路。その中心は鉄・金・銅の鉱物資源奥州の和鉄の道である。

雪が覆い被さる川筋の中腹を川筋にそって鉄路が延びている峠越。周辺が雪だけなので余計に奥羽山脈で隔てられた出羽・秋田への峠越えの道のすごさ 古代最後まで中央政権が直接支配できなかった理由が判る様な気がする。

厳しい峠道を越えて 田沢湖・角館に入ると一面銀世界であるが、明るい市街が広がり、大曲に入ると秋田県の大河 雄物川を渡ると一面雪野原の秋田平野が広がり、この雄物川にそって海岸に出ると秋田。海岸に近づくにつれ、雪が消え 秋田市周辺には雪はなし。朝 上野を出て昼前には秋田についた。

参考 佐藤清忠氏著「ヒタカミの鬼 一和我の里一」より 抜粋

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html>

「出羽は、いかがでしたか」

アテルイもモレに尋ねた。出羽は現在の横手市の近辺である。そこにある雄勝城で、エミシの民と朝廷の間でいざこざがあったのである。

「雄勝城に帰順する者と背くものが半々というところでしょうか。いまは、出羽の租や調は、比較的軽い状況ですが、いずれ、出舉（すいこ。年利率50%で朝廷の稻を貸す制度）や、義倉（ぎそう。凶作にそなえた穀物の無尽制度）で、がんじがらめになることを心配していたようです。征服された民のさだめですが」

「背いた人たちは、その後どのように暮らしているのですか」

「帰順した人が多くおりました。しかしすぐに西方（九州地方のこと）に送られるようですね。

ええ、ご推察のように、林業と製鉄の技術指導か兵士としてです。その他は山に逃げたようですね。

子波族の地にも、多数流れたようです。和我でも受け入れました。たら作業に就いております」

長老側近でなければ知らない情報がモレの口から紹介された。

「和我の鉄は、定評がありますからね」十三湊（とさみなど）の者が口をはさんだ。

和我の里では、「高殿たら」による生産様式が、和我川上流（現土畠鉱山付近）に導入されており、天候に関係なく一定のペースで鉄素材を生産できたのである。モレは逆に、十三湊の者に尋ねた。

「十三湊の鉄の相場はいかがですか」

モレの関心は和我の主力交易品である鉄素材の状況である。和我の若者達も緊張した顔になる。

十三湊の者はしかし、暗い顔で答えた。

「ふむ。正直な話、下がり加減になった。越後の連中の話だが、このところ朝廷改修や造都の熱が冷め、新羅侵略を計画していた仲麻呂もいなくなった。しかし近江や出雲、越後はあいかわらず鉄を量産し続けているようなので、陸奥の鉄がだぶついたようだ」

エミシの玄関十三湊には、越後等から鉄素材や木材また塩、魚介類の仲買人の来訪者が多い。

この貿易港には、交易品の流通のみならず、村を追われた者や渡来人がたどり着き、その後、当時の禁制品であった製鉄に従事することも多かった。

アテルイは、このような者の組織化や開発、流通を行うことが本業であった。

広いコンコースのある秋田駅の二階から西側を見ると奥羽山脈を背に広がる市街地越しに南北に長く連なる低い丘陵地が見える。この丘陵地が古代 秋田の製鉄基地となったところ。

この一角の南の端の山裾に秋田大学があり、さらに北側に古代秋田城遺跡 そして 古代製鉄遺跡群ならびに製鉄関連地名群がつながる金足地区へと続いている。

案内所で地図を貰ってスケジュール確認する。

秋田大学の鉱業博物館を見学して 古代秋田城へいって 木村清幸氏の「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」で知った金足集落まで足をのばす計画

3.1. 秋田大学 工学資源学部 付属 鉱業博物館



秋田大学 鉱業博物館 と 大学キャンパス 2003. 3. 15.



秋田駅の東側にて 車で約 10 分 市街地を抜け 丘陵地の高台の上に鉱物博物館があり、その下には大学のキャンパス越しに市街地が見える。

是非訪づれたかった鉱業博物館。立派な建物にビックリ。

確か昔は鉱山学部だったと思いますが 鉱物資源の国秋田を支える秋田大学。「工学資源学部」の名に日本の鉱物資源開発のエンジニアを育てて来た伝統と自負の意気込みを感じました。

秋田県を鉱物資源国にした奥羽山脈に延びる黒鉱鉱脈
鉄・金をはじめ銅 亜鉛ほかそして石炭・油まで産出。
数々の鉱石標本が円形の建物の中に収められていました。

兵庫県生野銀山の三菱コレクション 茨城県の自然博物館の鉱石コレクションや東北大金属博物館も立派でしたが、量・質・大きさとも勝るとも劣らない素晴らしい素晴らしさでした。



鉱石標本展示

鉄鉱石も明礬石など変わった鉱石も見つけました。

標本というと大抵は 親指大の大きさなのですが、何百と並ぶ鉱石標本がいずれもこぶし大の大きさ。

そして 鉄鉱石標本だけでも数十を越える豊富さにビックリしました。

また 蝦夷の和鉄生産基地和賀 仙人峠から産出した鉄鉱石も見ました。



岩手県和賀郡和賀町仙人鉱山 赤鉄鉱



群馬県六合村 群馬鉱山 鉄明礬石

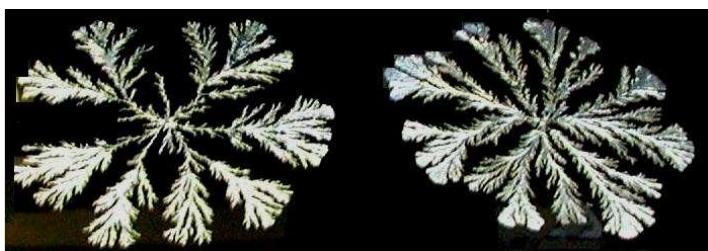
含鉄温泉の一つきれいな黄色をした温泉 明礬泉 また 赤鉄鉱を含む赤湯にも

温泉はわかったけどどんな形で鉄がふくまれているのか……鉱石を見てみたいと思っていましたが、鉱業博物館で大きな標本に出会えて満足。

又、 雪の結晶にも似た亜鉛の成長の姿 亜鉛花の美しさも印象的でした。メッキの中にこんな技術があるなど知りませんでした。

あ　え　ん　か
亜鉛花

亜鉛花の美しさ



残念ながら和鉄・たらん関係の展示はありませんでしたが、和賀 仙人峠の鉄鉱石を見れたのも収穫。やっぱり大したコレクションの数々 その立派さに伝統を支えてきた重みを感じました。

3.2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城



秋田駅より北へ車で約15分八橋・泉・金沙神社などの地名を眺めながら中心部の市街地を抜けて国道を走ると左手に小高い丘が見えてくる。

ミッションスクールの所から左に折れ、丘陵地への道を登って行くと雑木林が広がる丘陵の上に出ると外郭東門とそれに連なる築地塀が復元されている国の史跡「秋田城跡」の中に入る。

この秋田城のある丘陵は高清水丘陵と呼ばれ、秋田駅より約三キロメートル北 土崎駅の南に位置し、旧雄物川と草生津川に挟まれた標高 30~50 メートルの丘陵地である



秋田城跡 復元された外郭東門 03.3.15.

秋田城は奈良時代から平安にわたって約3世紀にわたっておかれた日本最北端の大規模な役所で政治・軍事・文化の中心地だった。

天平5年（733）に秋田村高清水岡に造られた当初は「出羽柵」と呼ばれ、『続日本紀』733（天平5）年の条に「出羽柵遷置於秋田村高清水岡」と記されている。

やがて天平宝字8年（764）頃 秋田城と呼ばれるようになった。

その後、奈良時代には「国府」が置かれ、大陸の渤海国（中国東北部）など対北方交易の拠点としても重要な役割を果たしていましたと考えられています。

秋田城跡のほぼ 中央

部の地域を政庁と呼んでいるが、その大きさは東西94m 南北77mで周囲に塀をめぐらし、その中に建物が規則的に配置され、ここで重要な儀式や政務がとられた。

秋田城跡は昭和14年（1939）9月に90ヘクタールが国の史跡指定。 昭和47



年（1972）から発掘調査を開始し、現在も継続中である。

秋田城 政庁跡 発掘現場

2003.3.15



金沢城 政府跡 発掘現場 2002.3.15

3.3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる



木村清幸氏「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」の研究で秋田市周辺から八郎潟東岸にかけて、数多くの製鉄関連地名があることを知り、その中で唯一知っていたのが「金足」の地名。

『甲子園に出てくる常連校「金足農業高校」って 秋田市の学校・・・・???』

木村氏の資料にでこわして調べるまで全く知りませんでした。



秋田市 金足追分周辺

秋田城のある丘陵地から降りて、国道をさらに北へ15分 市街地を抜け、左手海岸沿いに私の仲間が溶接をしたタンクのある秋田発電所の煙突を過ぎ、男鹿半島が近くと田園地帯が広がる秋田市の北の端が金足地区。右手には田園地帯の向こうに低い丘陵地が延々と北に伸びている。

この丘陵地を南から北へ古代のたたら集団が薪・炭を求めて移動ながら和鉄精錬を続けていった所である。

奥羽本線で秋田駅から三つ目追分駅のところで車を降りて東へ秋田歴史博物館のある林の中に入ってゆくと金足追分から金足小泉集落への道。いきなり林の中に「金足農高」がありました。



奥羽本線 追分駅



金足地区の丘陵地と県立博物館

2003. 3. 25.

林の一本道 奈良姓の家が並ぶ家並みを過ぎると金足風致地区の標識と葦が生茂る潟か散らばる丘陵地にはいり、潟の向こうには丘陵地をバックに秋田県立博物館。残念ながら県立博物館も改装中で閉館。



丘陵地の木々の芽吹きはまだ褐色の丘陵地が続いているが 古代の和鉄製造に思いをはせながらの里歩き。

どのあたりの丘陵に生産基地があつたのか・・・

秋田の蝦夷は阿倍比羅夫の征伐軍に戦闘をいどまず 従順足ったという。

俘囚となった製鉄の民はどうしたろう・・・

この丘陵地のたら衆はその流れか・・・それとも渤海 朝鮮半島からやって来た韓鍛冶か
大和の鍛冶か・・・

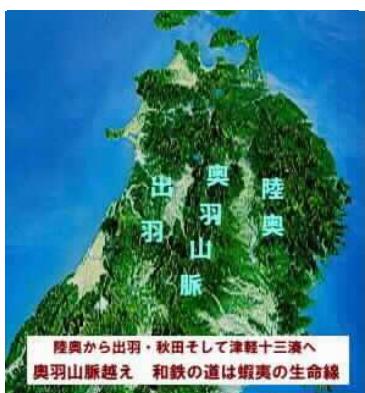
地図には古代製鉄関連地名と木村氏が指摘した金足・小泉・新城などの地名とともに

下刈 浦山も製鉄関連か・・・

たら製鉄関連の遺跡そのものにはぶち当たりませんでしたが、本当に goo な蝦夷和鐵の道 を訪ねる秋田 walk でした。

このまま 能代まで八郎潟東岸の和鉄関連遺跡探訪も魅力ですが、やっぱり横手から北上線に乗って蝦夷のふるさと和賀へ 古代出羽から陸奥への仙人峠道を通りたい。

午後2時過ぎ 秋田新幹線・奥羽本線の乗継で横手へ



秋田の後背地 古代には蝦夷の鐵の生産基地であつたろう 長く延びる丘陵地を眺めながら秋田を後にして横手へ向かった。

2003. 3. 15. 秋田から横手への汽車のなかで

5. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

【完】